



## イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

創刊500号特別記念コラム

### 第500回 何とかしようよ、この日本！

201211.25

勝手気ままなこのコラムを書き始めたのが、今からおよそ9年前、その動機は全く定かでない。52歳のおじさんが、なんとなくパソコンの練習になるから…だったかもしれない。

その時々思い付いたものを、恥ずかしげなく書き綴り、また他人に強制的に送りつけ、颯（ひんしゅく）をかいて続けて500回になった。

その一部は『何とかしようよ、この日本！』（日新報道2005年）と題され、全国の書店にも並んだ。コラムの根底を流れる思想は、著書名の如く、恐らくそんな気持ちだったかもしれない。

いつまで続けるつもりか、皆目わからん無節操極まりない稚拙文を、良く、辛抱強く付き合っただいた皆様に、何と感謝したらいいのか。まずは御礼である。

何とかしようよ、この日本！～500回目にしても、この気持ちに変わりはなく、この、メモリアルコラムもまた、同じテーマであるが、少し長くなった。

よせばいいのに(♪)「今日の言葉」と称して、毎日先人達の名言を Facebook にアップしている。ほとんど自虐的だ。でもお陰様で、手元に「何干」という名言が集まった。その教えをもとに、自分表現を試みたくなった。そんな記念号であること、冒頭に記(しる)す。

## 1. 政治と政治家を総括する！

「政治家の秘訣は何もない。ただ「正心誠意」の四文字ばかりだ」…幕末の巨星、勝海舟の言葉である。

「政治は、万民のためを判断基準とする王道を歩むべきで、権謀術数による霸道を排すべきだ」(幕末の政治家 横井小楠)とは、古今東西の歴史が語る「真理」である。

一流の政治家にとって必要な資質は、「獅子の雄雄しさ」「羊のやさしさ」「蛇の執拗さ」「狐の狡猾さ」といわれる。そのためには政治家は、「大きな耳、小さな口、やさしい目」(プロ野球コーチ 高島導宏)が備わっていなければならない。

今まで「小さな口と優しい目」を、民主党幹部に見た記憶がない。相手の恥部を露呈させ攻め立てる「大きな口と鋭い眼光は総じて、温かくなかったような気がする。

自民党政権の末期から民主党与党の3年間、この国にはそんな政治家ばかり目立っていた。学歴や経歴を見ると、なるほど素晴らしいかもしれない。

しかし、「人は能力だけではこの世に立つことはできない。人は能力とともに徳を持つことが必要である」(医学者 野口英世)。

「政治は、学問や科学ではない。術である。人の心を知るといふ術なのです。人の心を察する—こう云うと悪くすると陰険らしくも聞こえるがそうではない。他人の苦は自己の苦しみであると

いう、この同情から多数の幸福が得られてよい政治が生まれるのです」とは早稲田の創始者、**大隈重信**の言葉である。

巧みな話術と、誰が見てもかっこいいが、およそ実現性のない「おいしい魅力ネタ」で国民を欺き続け、反省はせず、かえって人のせいばかりで相手を叱責する、口八丁手八丁の政治ショウは、腹立たしさを超越し、ほとんど滑稽に見えた。

「ものを作る苦労や喜びを知っている人は、自分の失敗を、そう簡単に人のせいにはしません」とは **SONY 創業者 井深大**の名言である。

「言葉の前に心あり 言葉の後ろに行動あり」(話し方教室 **江川ひろし**)、言葉の意味する大きな責任を全く解しない、タレント、素人、お坊ちゃまたちに翻弄され続けた。

「半面を知って全面を知らないのは半人前の見識」(**二宮尊徳**)、

「小事をきらって大事を望む者に成功はない」(**二宮尊徳**)との言葉が、虚しく空回りする。

日本人が美德としたこの教養を持ち得ないこの連中は、「日本人」ではないのかもしれない。

「他人の悪をよく見る者は、己が悪、これを見ず」(**足利尊氏**)という言葉、他人のあら捜しと罵倒、叱責に慣れきった民主党の幹部に聞かせたい。

片や「民主主義の基本は数」(元総理大臣 **田中角栄**)とばかり、何を勘違いしたのか、政治をやらず選挙ばかりを考える政治屋さん、「政治屋は次の選挙を考え、政治家は次の時代のことを考える」(元アメリカアーカンソー州知事 **ジェームス・ポール・クラーク**)の言葉通り、政治屋素人集団の結集に血眼になっている輩がいる。

**小沢一郎**、僕はかつて好きなタイプの政治家だった。が、彼を意見する「心友」をことごとく排除してきた結果、小沢の周辺環境は彼にとって平和すぎた。いつの間にか、政治屋に墮ち崩れた、典型だと言っておく。「我欲」のモデルになりきった小沢一郎、彼の師、田中角栄とは雲泥の差があり、残念極まりない。

こんな集合体だから、与党なのに、政治、政策的には何も決まらない。

「弱体な国家は常に優柔不断である。そして決断に手間取ることはこれまた常に有害である」(ルネサンス期イタリアの思想家・文筆家 **ニッコロ・マキャヴェッリ**)、

「見たくないものは見ない。考えたくないことは考えない。米国は考えようと努力する国。日本は考えないままにしておく国」(工学者、工学博士 **畑村洋太郎**)、の結果、世界の信用を急速に無くしてきた。もはや日本に、どこも頼らない…そんな国に成り下がったのがこの3年間。更に極めて遺憾なのが、こんな風潮が蔓延し、国民もいつしかそれに、慣れてしまったこと、騒擾集団のマスコミと賢者・識者達が質すことを忘れ、政治の本質が論じられることのないまま、3年間の民主党政権が過ぎ去った。これが今の日本の、国民レベルとなってしまった。

自分の都合でしか考えず、動かず、社会主義的とは看板だけで、その実、政治屋どもの利己主義に迷走する姿は、多くの外国の信頼を失墜した。

「もしや我が国が利己主義を政策とするに至らば、我が帝国の有せる声望は一朝にして失墜するのである」(初代内閣総理大臣 **伊藤博文**)。

民意、民意とは、自分の都合の良い民意であり、「民意に従えは、政治の自殺」(作家、哲

学者 **適菜収**)であり、アンケートと世論調査、国民投票をやればいい、政治家の存在は、無用となる話である。政治家に必要なのは知識だけではなく、その知識を深く理解し、活用する「教養」だと思う。重要なのは、形だけ言葉だけの「理念」ではない。

「ほんとの勇氣とは日常の場合に、迫害や死を恐れず、自分の信念を吐露しうる気力でしょう」(小説家 **海音寺潮五郎**)。

「自ら省みて素行を修め品格を高くし、外国人より尊敬を受けるようになる、それが本当の愛国である」(柔道家 **加納治五郎**)、そんな風に考える政治家が、誰か一人でもいただろうか。

## 2. 安全と外交、防衛について

最近にわかに物騒な話題が、外交である。特に中国、韓国との領土問題は陰悪化が全く解消されていない。戦争を仕掛ける中国のもくろみを、日本人はドラマの世界としか見ていない。

「外交とは華麗な衣装をまとった軍事」とは、かの**ナポレオン**の言葉である。

古くから**ローマの格言**に「平和を欲するものは戦争に備えよ」とあることご存じか？

つまり、外交と軍事は同じコインの裏表であることは、日本人以外みんな知っている事実である。世界的常識は、「良好な治安と国の防衛こそ最高の社会福祉である」(初代内閣安全保障室長; **佐々淳行**)であり、日本人が全く理解できない「真実」がここにある。

「憲法九条は非常に賢明な規定だが、泥棒がまだいるのに警察を止めるようなものだ」とは、日本の憲法に対する世界の見識であり、理想郷上の概念と思っている。

かの**吉田茂**さえ、「いつまでも外国によってその安全を守ることは国民のプライドが許さない」と言っている。日本は永いこと、この負担を負わず、アメリカに任せてきた。

「土地や人民を異国に奪われるは日本の恥。土地一寸、人間一人たりとて死守すべし」、江戸時代の政治家 **藤田東湖**はそんな信念のある日本人だった。

「安全は与えられるものではなく、つくるもの」とは、最近の政治家**小泉純一郎**が言った言葉である。

「国の安危存亡に関係する外交を軽々しく論じ去つて、何でも意の如(ごと)く出来るが如くに思ふのは、多くは実験のない人の空論である」(**伊藤博文**)。

「米兵は出ていけ〜！」お決まりのシュピレコールは、沖縄の定番となった。

そんな日本人のために、アメリカ人の若き血を犠牲にできるか！

日本人が自らの血を流してから、アメリカは考える…日米安保のアメリカの本音であろう。

アメリカは何とかして国防費を削減したがっている。

日本から米兵の全面撤退を決断する暴挙ができるのは、恐らく**オバマ大統領**だけかもしれない。それを最も望んでいるのは中国である。手薄になった日本海を、虎視眈々と狙っている。

中国はアメリカとの関係だけを思慮している。アメリカとの、良好な関係を維持できる「日本海戦争(武力 or 経済)」を、何百回もシミュレーションしている。

アメリカも中国も、もはや日本のポジションはかつてほど重くない。

〇〇前都知事ほど過激な右傾化は危険である。

何ら論議もなく、いきなり自衛隊を「軍」にしろと言うのも、あまりにも突飛すぎる。

しかし、古今東西の先人たちが言うように、外交上の「力」として、世界が納得できる日本なりの国防を、本気で考え、議論すべき時が来たと言えるかもしれない。

### 3. 日本社会と日本人、その歴史観

サッカーの監督イビチャ・オシムは、「現在、日本人は非常に高い生活水準を保っているが、それは勤勉だった先代が作ってきた生活水準を今の人々が享受しているだけなのではないか」と、現代日本に警告している。

「戦争は駄目。喧嘩も駄目。みんないい子、として育てられた子供たちがいとも簡単に人を殺すようになった」(漫画家、コメンテーター さかもと未明)とは、何か物凄い矛盾を感じる。

「ただ反戦だけを唱える日本人が無責任に思えた」(報道写真家 長倉洋海)、口先だけで、何もやらなくなった日本人。本物の平和維持活動なんて、誰ひとりやろうとしない日本人。

「今の日本人はまさに思考停止状態。考えることをやめてしまっている。だから世間や他人のことばかりが気になる。そんな不自由の中に幸福はありません」(建築家 安藤忠雄)

「私はこの頃、日本という国家そのものが衰弱してきているように思えて仕方がない。何故こんな国になってしまったのか。それは、戦後66年間、米国の傘の下でよくわからない「平和」を享受しながら、何も考えずにやってきたことのツケが回ってきているのだと思います。米国は自由、フランスは自由、平等、博愛という国家思想を持っていますが、今の日本人が持っているのは『我欲』だけ。金銭欲、物欲、性欲です」(前東京都知事、小説家 石原慎太郎)。

世界中で一番悪い国民は日本人、そんな自虐史観を植え付けてきた日教組や朝日新聞は、日本を亡国に導くことが狙いなのだろうか。

アメリカの属国よりは、中国の支配になった方が良いと考えているのかもしれない。

朝日新聞様、「報道の自由と言うが、事実と異なることを報道する自由はない」とは、自民党の菅義偉が言った言葉である。

自虐史観の象徴は…、

*1983年に吉田清治なる人物が、『私の戦争犯罪 朝鮮人強制連行』を出版、吉田は濟州島で日本軍人らを引率し、若い未婚女性や赤ん坊を抱いた母親を連行し、レイプしたという「体験」を語った。*

*後にこれが全く嘘だとわかった。『済州新聞』は、現地住民はそのようなことはなかった、*

*吉田は嘘をついていると1989年8月14日同紙に書いている。*

*この吉田の証言から8年後、1991年8月11日、朝日新聞が「元朝鮮人従軍慰安婦 戦後半世紀 重い口開く」という大見出しを付けた記事を報道して、第1次慰安婦騒ぎが始まる。*

嘘をもとにした、世紀の大誤報であり、朝日新聞は検証も謝罪もしていない。

これがインテリ好きな大新聞「朝日」の実態であり、慰安婦問題を捏造し、国際問題化させた。

日本人を「獣(けもの)以下」と決めつけたのは、日本の、朝日新聞である。  
橋下徹大阪市長は「従軍慰安婦問題で強制連行があったという確たる証拠はない」と述べ、  
石原慎太郎都知事(当時)も「はっきり言って強制ではない。強制した証拠がどこにありますか」と語っている。従軍慰安婦問題なんて確固たる証拠は、どこにもないようだ。

日本人なのに、自国の歴史すら関心がなく、したがって何も調べない、勉強しないで平気。  
「昔の日本人は悪いことしていた」的教育を「学校」で教えている国、一体どこにあるだろう。  
教育とはなんだ、計算の仕方を教え、偏差値を高めて、みんなフリーターばかり作っている「先生」は、次代を担う子供たちに、何をしようとしているのだ。  
精神的強さ、人としての教養、自国を誇るプライドを伝え、育み、導くべき「先生」は、どこにもいなくなった。こんな不幸な子供達は、世界中にいない！

#### 4. 見事に開花した「3R・5D・3S 政策」

今の日本の根底に潜むドロドロ、いやむしろ得体の知れないフワフワとした脱力感、捉えようもない無気力感、殺伐としたコミュニティは、一体何なんだろうか。

日本のアイデンティティを取り去り、彷徨(さまよ)える無国籍国家の創造を目指したのは、実は60年以上前の占領軍の「骨抜き統治思想」だった。  
天皇を象徴と化し、宗教的、精神的拠りどころを無くし、武力や弾圧でなく、「教育と政治と享楽で日本を骨抜きにしよう」という、占領軍の日本統治思想は、戦後67年たった今、恐らく見事に開花したと言って良い。

「日本を全く骨抜きにするこの「3R・5D・3S 政策」を、日本人はむしろ喜んで、これに応じ、これに迎合した。あるいは、これに乗じて野心家が輩出してきた。日教組というものがその代表的なものであります。そのほか悪質な労働組合、それから言論機関の頹廃、こういったものは皆、この政策から生まれたわけであります」(陽明学者・思想家 安岡正篤)

基本原則「3R」とは、Revenge(復讐)、Reform(改組)、Revive(復活)、  
重点的施策としての「5D」は、Disarmament(武装解除)、Demilitarization(軍国主義排除)、  
Disindustrialization(工業生産力破壊)、Decentralization(中心勢力解体)、Democratization(民主化)、

そして補助政策としての「3S」Screen(映画)、Sport(スポーツ)、Sex(セックス)を策定した。  
これが GHQ のガーディナー参事官が作った「日本骨抜き戦略」である。

国民に催眠をかける手段は時代状況によって多様だが、現代国家ではいわゆる 3S 政策が利用されているのも、全く真実である。

## 5. 何とかしようよ、この日本！

日本人であることの誇りを感じている日本人はどの程度いるのであろうか。

少し古いが、電通総研「世界価値観調査 2005」国内結果レポート」によると、対象 60 カ国中、25 カ国は、自国民としての誇りを感じている人が 90%以上となっている。第1位は、エジプトであり、フィリピン、ベトナムと続いている。主要先進国の中では、米国で、米国人としての誇りを感じている人が、94.3%と最も高い。他の主要先進国としては、カナダがやはり 90%以上と高く、イタリア、フランス、英国などは、80%台となっている。ロシア、ドイツは 60%台と少ない。そして日本は、54.2%とかなり 5 割を上回る程度である。

いかにして、日本人は祖国への誇りを、かくも失ったのだろうか。

でも、少しずつだが、日本を見直し、日本人に誇りを見出そうとしている人がいる。

左翼の巨匠と目されてきた、かの「ベ平連」の創設者である小田実は、後になってこんなことを述べている。

「太平洋戦争は、最後は徹底的な敗北に終わったが、西洋に対して戦いを挑み、曲がりなりにも緒戦においては勝利を収めたことである。この事実は今日人々は全く無視して語らないが、日本人(あるいは、西洋以外の他の国々、ことにアジア・アフリカの諸国の人々)に大きな自信を与えた」。

食うに困らず、住むに困らず、着るに困らず、たまに贅沢もできる、そんな生活を享受しながら、その源にある、日本の歴史や伝統、文化、日本人の心、その素晴らしさを理解しようとしなさい。これはもう、先人達への冒瀆(ぼうとく)である。

いい加減、こんなことを繰り返してはならない。

むしろ外国人の方が分っている。

…私が幼い時のことですが、母は私に「塙保己一先生はあなたの人生の目標になる方ですよ」とよく話してくれたものです。日本には幼くして目がまったく見えなくなってしまうのに、努力して立派な学者になった塙先生という方がいたと教えられました。それを聞いて、私は励まされて、一生懸命勉強しました。(1937年4月26日ヘレンケラー来日公演より)

あくまで個人的すぎる、小さな例かもしれない。

しかし、ヘレンケラーの生涯には、日本人の心が大きく貢献したに違いない。

自国民さえ容赦なく殺戮する中国や、内戦を繰り返す諸外国は後を絶たない。

人類史上最も残虐な広島・長崎を経験した国日本は、敗戦後67年間、直接的には一度も戦争をしていない。東日本大震災にも耐え、必死に生きようとするパワーに、驚嘆する外国人。

**大丈夫！何とかできる、日本人、そう思い込ませつつ、**

長すぎた稚拙な文章にピリオドを付け、筆を置くこととする。